「門松立てず、煤はかず」考

黄色瑞華

一

一茶が『おらが春』の起稿に当たって、その巻頭文として用意したものは、『沙石集』巻九・下の「迎講事」であった。梵舜本によるとそれは、

丹後国鳧鴨（注・慶長古活字十二行本など「普甲寺」）ト云所ニ上人アリケリ。極楽ノ往生ヲ願テ、万事ヲ捨テ臨終正念ノ事ヲ思ヒ、聖衆来迎ノ儀ヲゾ願ケル。セメテモ志ヲ休ントテ、世間ノ人ハ正月ノ初ハ思願フ事、イワヒ（ハ）事ニスル習ナレバ、我モイワヒ（ハ）事セント思テ、大晦日ノ夜、一人ツカフ小法師ニ状ヲ書テトラセケリ。「此状ヲモテ、明朝元日ニ門ヲ叩テ、物申サントイヘ」。「キヅ（イ）クヨリ」ト問バ、「極楽ヨリ阿弥陀仏ノ御使ナリ。御文候」トテ、此状ヲ我ニ与ヘヨト云テ、外ヘヤリヌ。上人ノ教ノ如ニ云テ、門ヲ叩キテ、約束ノ如ク問答ス。此状ヲ、イソギアハ（ワ）テサワギ、ハダシニテ出デヽ請取、頂戴シテヨミケリ。「娑婆世界ハ、衆苦充満ノ国也。早厭離シテ、念仏修善勤行シテ我国ニ来ルベシ。我、聖衆ト共〔ニ〕来迎スベシ」トヨミツヽ、サメホロト泣〳〵スル事、毎年ニ不レ怠。其国ノ国司下リテ、人々国ノ事物語ケルツイデニ、斯ル上人アルヨシ申ケルヲ国司聞テ、随喜シツヽ、上人〔ニ〕対面シテ、「何事ニテモ仰ヲ承テ結縁可レ申」ト、被レ申ケレドモ、「遁世ノ身ニテ侍リ。別ノ所望ナシ」ト、返事セラレケレドモ、「事コソカワレドモ（ハ）、人ノ身ニハ必要アル事ナリ」ト、シキテ（ヒ）被レ申ケレバ、「迎講ト名テ、聖衆ノ来迎ノヨソヲキ（ホ）シテ（ヒ）、心ヲモナグサメ、臨終ノナラシニモセバヤト思事侍リ」ト被レ申ケレバ、仏菩薩〔ノ〕装束等、上人〔ノ〕所望ニ随テ調ジテゾ被レ送ケル。サテ聖衆来迎ノ儀式ノ臨終ノ作法ナムド、年久ナラシテ、思ノ如ク。臨終ノ時モ来迎ノ儀ニテ、終目出カリケリ。（以下略）（注1）

というものである。作者はこれを材に次のように構想叙述する。

昔、たんごの国普甲寺といふ所に、深く浄土をねがふ上人ありけり。としの始ハ世間祝ひごとしてざゝめけば、我もせん迚、大卅日の夜、ひとりつかふ小法師に手紙したゝめ渡して、翌の暁にしかぐせよと、きといひをしへて本堂へとまりにやりぬ。小法師ハ元日の旦、いまだ隅ミぐハ小闇キに、初烏の声とおなじくがバと起て、教へのごとく表門ッを(ママ)丁くと敲けバ、内より「いづこより」と問ふ時、「西方弥陀仏より年始の使僧に候。」と答ふるよりはやく人裸足ニておどり(を)出で、門の扉を左右へさっと開きて、小法師を上座に称(請)じて、きのふの手紙をとりてうやくしくいだきて、読ていはく「其世界ハ衆苦充満に候間、はやく吾国に来たるべし。聖衆出むかひしてまち人候。」とよゞ終りて、「おゝく」と泣けるとかや。此上人、ミづから工ミ拵へたる悲しミに、ミづからなげきツゝ、初春の浄衣を絞りて、したゞる泪を見て祝ふとは、物に狂ふさまながら、俗人ニ対して無常を演ルを礼とすると聞からに、仏門においてハ、いはひの骨張なるべけれ。(注2)

『沙石集』に取材した右の叙述を受けて、第一句をのぞき第一八句を含んだ第一話後半部を構想・叙述し、これを第二一話成立後、自身の宗教観と首尾の呼応を考えて各面と用紙とその用法を異にする二丁の差し替えを行ない定稿を成した。

『おらが春』の主題として作者が意図したものは、その内容からこの年代における自己の心境を記るすことにあり、それは継子としての自己の境涯をふりかえりつつ、育ちゆく長女さとへの恩愛と将来への期待を述べることに主眼をおいたものと考えられる。『おらが春』は、一年の句文集の体をとり、これは少なくとも前年からの構想であった。したがって巻頭には、新年（迎春）の素材を用意するのは当然のことであり、『父の終焉日記』における作者の宗教観や、『寛政三年紀行』にみられる浄土経典の把握などを併せ考えれば、『沙石集』の「迎講事」に材を取ったことはうなずける。又、それを分析することによって、『父の終焉日記』以降の念仏者としての生の軌跡をみることができよう。

二

さて、第一話の後半部、差し替えが行なわれる以前、その初稿かと推定される真蹟には、

おのれかしらには霜をいたゞき、額にはしは(わ)く波の寄せ来る齢にて、弥陀たのむすべもしらで、うかくと月日を費すうちに、此世の縁尽せぬにや、五十余年我身につもる老を忘れて、一期の月も西山にかたぶく命ながらへて、露の玉の緒の今迄切ざるもふしぎ。又、ことし鶴亀にたぐへて祝尽し、門松もかざる。(注3)

と、ある。しかるに、定稿には、

それとはいさゝか替りて、おのれらハ、俗塵に埋れて世渡る境界ながら、鶴亀にたぐへての祝尽しも、厄払いの口上めきて、そらぐしく思ふからに、から風の吹けばとぶ屑屋ハ、くづ屋のあるべきやうに、門松立てず煤はかず、雪の山路の曲り形りに、ことしの春もあなた任せになんむかへける。

と、結んである。

『おらが春』巻頭の章段において、作者はまず、「迎講事」に材を得た普甲寺上人の話を叙述し、真蹟の「おのれかしらには」以下を書いた。そして、年末には蓮如の『御文章』になぞらえた第二一話を成した。さらに、第二一話との呼応を考えて、定稿の「それとはいさゝか替りて」以下に書き替えたとみるのが私の一貫した考え方である。

真蹟にみられる文意は、「私はすでに頭に白いものをいただき、額にはしわの寄るこの年になっても、真に仏を頼むすべも知らずに生きている。はずかしいことだ。それなのに、こうして元気でいられるのは不思議というほかはなく、今年も又、鶴亀にたぐえての祝尽し、門松も飾ることができた。」というものである。すなわち、普甲寺上人の行ないを讃え、わが身と比較し、さらに碌々として新しい年を迎えたその身上を自嘲をまじえて述べたものである。『おらが春』第一二話は、さとに対する恩愛の情を述べたものであるが、そのさとは、仏壇に蠟燭をともし、鈴を打ちならすと、どこにいてもいそがわしく這い寄って来て、「さわらびのちいさき手を合せて、なんむく」と唱える。作者はそれに対して、「しほらしく、ゆかしく、なつかしく、殊勝也。」と述べ、さらに、

それニつけても、おのれかしらには、いくらかの霜をいたゞき、額にはしハく波の寄せ来る齢ニて、弥陀たのむすべもしらでうかく月日費やすこそ、二ッ子の手前もはづかしけれと思ふも……

と、述べている。このあたり、作者の常套的表現ではあるが、成稿後第一話後半部のくり返しに気付かないはずはない。だが、改稿の意図は別にあり、その第一は、普甲寺上人の迎講の受けとめ方である。作者はすでに『父の終焉日記』（一九日）において、

……父うるハしく目をあき給ひ、い、い、いなん。連れて歩め。と云るゝ。いづくへばし行給ふらん。と問ひければ、いふにやをよぶ、至心々経欲生我国。と病なき時の声のごとく、たからかにとなへ給ふ。心にかゝる事ばし「の」給ふ物哉と、心すまして居たりける。我もいざぐく、と四度、七度、九度、いざぐく、とばかりいへば、又すやく眠り給ひき。後におもへば、是ぞ物の「の」給ひ

終、おもへば辞世にてありし也。(注4)

と、『無量寿経』第一九願（至心発心の願）にある、

設我得仏。十方衆生。発菩提心。修諸功徳。至心発願。欲生我国。臨寿終時。仮令不与。大衆囲繞。現其人前者。不取正覚。(注5)

『阿弥陀経』の、

聞説阿弥陀仏。執持名号。若一日。若二日。若三日。若四日。若五日。若六日。一心不乱。其人臨命終時。阿弥陀仏。与諸聖衆。現在其前。是人終止。心不顛倒。即得往生。阿弥陀仏。極楽国土。(注6)

などを承知していた。したがって「来迎」そのものを否定する必要は全くなかったのである。

三

前掲の『阿弥陀経』にあるごとく、阿弥陀仏の慈悲を知り、その名号を心に信じて、時の多少にかかわらず一心に称名念仏して心を乱さないなら、その人が命終の時、阿弥陀仏は聖衆とともに来迎されるのである。したがって、「聖衆ノ来迎ノヨソヲキ(ホヒ)シテ、心ヲモナグサメ、臨終ノナラシニモセバヤト思事」など、この作者にとっては全く無用となる。

『おらが春』第二一話には、蓮如の『御文章』の影響が色濃く現れていて、

問ていはく、いか様に心得たらんには御流義に叶侍りなん。答ていはく、別に小むつかしき子細ハ不レ存候。たゞ自力他力何のかのいふ芥もくたを、さらりとちくらが沖へ流して、さて後生の大事ハ、其身を如来の御前に投出して、地獄なりとも極楽なりとも、あなた様の御はからひ次第あそばされくだされませと、御頼ミ申ばかり也。如斯決定しての上には、（中略）あながち作り声して念仏申ニ不レ及、ねがはずとも仏ハ守り給ふべし。是則、当流の安心とは申也。穴かしこ。

右の叙述の背後に、

タダ在家止住ノヤカラハ、一向ニモロ〳〵ノ雑行雑修ノワロキ執心ヲステ、弥陀如来ノ悲願ニ帰シ、一心ニウタガヒナクタノムココロノコ念ヲコルトキ、スミヤカニ弥陀如来光明ヲハナチテ、ソノヒトヲ摂取シタマフナリ。コレスナハチ、仏ノカタヨリタスケマシマ

スコヽロナリ。マタコレ、信心ヲ如来ヨリアタヘタマフトイフモ、コノコヽロナリ（『御文章』寛政二年）（注7）

カヽルアサマシキ罪業ニノミ朝タマドヒヌルワレラゴトキノイタヅラモノヲタスケントチカヒマシマス弥陀如来ノ本願ニテマシマスゾト、フカク信ジテ、一心ニフタゴヽロナク弥陀一仏ノ悲願ニスガリテ、タスケマシマセトオモフコヽロノ一念ノ信マコトナレバ、カナラズ如来ノ御タスケニアヅカルモノナリ。（文明三年一二月一八日）

ソレ当流聖人ノ御勧化ノ安心トイフハ、アナガチニ罪障ノ軽重ヲイハズ、タヾ一念ニ弥陀如来後生タスケタマヘト帰命セシヤカラハ、一人トシテモ報土往生ヲトゲズトイフコトアルベカラズト各々コヽロウベシ。此ホカニハ更ニ別ノ子細アルベカラズトオモフベキモノナリ、（明応六年一一月二五日）

抑、十悪五逆トイフツミフカキ人モ、又五障三従ノ女モ、万事ヲナゲステヽ、一心ニ弥陀如来コノタビノ後生タスケ給ヘト、ヒシトタノマン人ハ、十人モ百人モミナトモニ極楽世界ニ往生スベキ事、サラニウタガフ心ツユホドモアルベカラズ。（明応七年一〇月二八日）

などがある。「モロ〳〵の雑行ヲナゲステヽ一心ニ弥陀ニ帰命セヨ」とくり返す、「雑行」とは正行、すなわち「一心に弥陀に帰命する」こと以外の行業を修して浄土往生を願うことである。されば、第二一話成稿の後は、真蹟に残る「おのれかしらには」以下の叙述は不似合となる。深く浄土往生を願う普甲寺上人の姿勢に非はないのだが、狂言にも似たその行ないは、少なくとも作者が文政三年末に到達した宗教には合致しない。

定稿の第一話では、普甲寺上人の行業に対し、「此上人、ミづから工ミ拵へたる悲しミに、ミづからなげきツヽ、初春の浄衣を絞りて、したゞる泪を見て祝ふとは、物に狂ふさまながら、俗人ニ対して無常を演ルを礼とすると聞からに仏門においてハ、いはひの骨張なるべけれ。」と受け、そのうえで、「それとはいさゝか替りて、おのれらハ、俗塵に埋れて世渡る境界ながら、鶴亀にたぐへての祝尽しも、厄払ひの口上めきてそらぐしく思ふからに、から風の吹けば飛ぶ屑屋ハ、くづ屋のあるべきやうに、門松立てず煤はかず、雪の山路の曲り形りに、ことしの春もあなた任せになんむかへける。」と、作者なりの自然法爾ともいうべき結びに改めた。

「おのれらは俗塵に埋れて世渡る境界ながら」という自己規定の背後には、第二一話を経た親鸞教徒一茶の確かな自覚がある。この自覚があって、末尾の「ことしの春もあなた任せになんむかへける。」という強い語気が生まれるのだ。

『おらが春』起稿の直前、すなわち『七番日記』文化一五年（この

年四月、文政に改元）一二月の条に、

あちへむきこちへねぢれて山道の曲りなりなるとしの暮

の俳諧歌がある。「あちへ向きこちへねぢれ」て迎える年の暮れは、作者自身の力で歩んで来た一年をふりかえるのであって、「から風の吹けば飛ぶ屑屋ハ、くづ屋のあるべきやうに」という「あなた任せ」の心境とは似て非なるものであり、愛娘さとの死に出会ったこの一年という時間が持つ意味は大きい。

四

「俗塵に埋れて」生きる境涯ではあっても、「後生の一大事ハ其身を如来の御前に投げ出して」、「あなた様の御はからひ次第あそばされくだされませ」と決定した親鸞教徒である。そういう自負から、普甲寺上人の「迎講」にも相当する新年の「祝尽し」でさえ、「厄払ひの口上めきて、そらぐ〜」しく思われるのである。

歳旦、床の間に蓬莱飾りを設け、縁起物を食し、門松を飾ることによって幸年を期待する。それが自身の手によって来たるべき年をほしいままにしようと願うのだ、とすれば作者の宗教の相入れざるところとなる。

『茶店問答』（角書に、真宗安心）「正月門松の問答付 巨丹が墓の事」に、

○女性とふていはく、鸞師の宗風にハ正月門松をたてあたハざるハいかに。

○尼公こたへていはく門松のこと。『簠簋内伝』を『神社考』に引ていはく巨丹がしかばねをたちて五節句にくばりて、調伏の威儀をおこなふいハゆる肇年のかどまつハ、巨丹が墓じるしの木なり。上の結ひむすびハ葬道の火爐なりといへり。世間にこれも巨丹が墓じるしと心得てたつる人なし。松ハ千歳の異木にて四季のへだてなき色のあざやかなるゆへに、としのはじめなれバとて、松にあやかり寿命長遠といふなり。これ厭離穢土のこゝろ薄きがいたすところなり。我宗におひて門松をたてざるハ、世間の松にあやかるとおもふ愚痴の心をきらひてたてざるなり。

○女性とふていはく、自余の宗門にては僧俗ともに松にあやかり、寿命長延のこゝろにて門松を立るとも、鸞師の宗風にハ巨丹がはかじるしとこゝろ得て、たてたまハゞかへつて化益のはしともなるべし。この義ハいかに。

○尼公答ていはく、我真宗におひてむかしより門松をたて来らバ、諸宗一同の心にてすぎさるべし。いま我宗にひとりたてざるゆへに真宗門下の為に欣求浄土のはゝともならぬべきなり。（注8）

となる。『真宗安心茶店問答』（題簽）は、武州釈秀円著（序）、半紙本三冊。刊年は不明、板元は京東六条・丁子屋九郎右衛門ほか三店。秀円の序に、「過にし弥生半のことなりしに、あなたこなた見物し思はず谷中といへる所に至る。ここに一院あり。道行人に尋しかば感応寺と答。寺の内を見わたせゞ、本堂、方丈、五重の塔、地中の坊舎ハかゞ知ず、実広々たる境地なり。又、かたはらを見はんべるに、腰を休る茶店あり。此所にいやしからぬ女性二人茶店に足を休めつつ、茶のみながら雑談をばせられける。」とあり、それを聞き書きする体で書かれた真宗の布教書である。

これによって、当時武州において親鸞教徒の多くは、「としのはじめなればとて、松にあやかり寿命長遠」を願う「門松」を立てず、しかもそれをもって、自身の信仰を確かめるがごとくだったことが推察される。

平田篤胤の『出定笑語』（平田先生講説・門人等筆記）附録一之下には、

親鸞ハ、甚ダノ利口奸智ノ勝レタル僧デ、トテモ仏道ノ本意タル、妻子ヲ持タズ、雑行雑修ト云テ、門松モ立テズ、人並ノ「ヲ為ズ、マタ鹿食ヲシテ、生グサヲ食ハヌト云ヤウナ「ハ、人タル者ノ、決シテ出来ヌ「ヂヤト見抜テ、観音の夢想ト偽リ、肉食妻帯ノ宗旨ヲ建立シ、釈迦ノ掟ニソムイテモ、時機ニ応ズル一宗ヲ始メント、企テタデム。(註9)

とある。講述筆記で、文意は通りにくいのだが、「雑行雑修ト云テ、門松モ立テズ、人並ノ「ヲ為ズ」は後の「決シテ出来ヌ」には係らず、「甚ダノ利口奸智ノ勝レタル僧デ」に続き、「人並ノ「ヲ為ズ」で結ぶべきもののように思われる。『茶店問答』にいう「世間の松にあやかるとおもふ愚知の心をきらひ」正月に門松を飾らないことを批難したものと解してよかろう。真宗門徒の中には、神社に参り、神棚を設け、門松を飾るという者も少なくないのだが、親鸞教の本旨からすれば、篤胤の言葉どおり、門松を飾らないばかりか「日本ニ生マレナガラ、此国中ハミナ、先祖カラ脈イタ、一家ジヤトハ気モ付ズ、銘々ノ祖先ナル神々様ヲ敬ハズ、剰へ大神宮ノ御祓サヘ家ニ置奉ラズ、切支丹同様ノ、異国外道ノ仏ニ追従シテ、大金ヲ費シ、仏檀ヲ座敷ノ真中ヘシツラヒ、肩衣ヲカケテ、朝夕ニセブリ暮スガ、此宗旨ノ持前ジヤ。」（『出定笑語』附録一之下）ということになろう。

一茶が、『おらが春』の最後の推敲で、今年も又、「鶴亀にたぐへて祝尽し、門松もかざる。」と平穏無事に迎えた新年をよろこぶ前稿を改めて、「門松立てず、煤はかず」としたのは、第二一話で到達した自身の信仰に従うとともに、世の排仏論者、その排仏論を意識してのことではなかったか。

なお、先学の多くはこのことにふれず、注もほとんどない。ただ、勝峯晋風『評釈一茶のおらが春』は、「一休和尚の狂歌に『餅つかずしめかざりせず松たてずかゝる家にも正月のきつ』（古今夷曲集）」をあ

げ、「新年を迎へる松も立てなければ師走の行事の煤掃もしない、世間並はづれた貧困性をさらけ出す。」と注している。川島つゆ『おらが春新解』も一休の同じ狂歌を引き、特に注はない。

注

1 日本古典文学大系『沙石集』（渡辺綱也校注）四二五P。

2 『校本おらが春』（黄色瑞華校注）一P、以下『おらが春』本文はこれによる。

3 『解註一茶文集』（伊藤正雄注）二一九P。

4 古典俳文学大系『一茶集』（丸山一彦校注）四四一、以下『父の終焉日記』本文はこれによる。

5・6 『仏説無量寿経』『仏説阿弥陀経』の経文は、大正新修大蔵経本により、『梵文和訳／無量寿経・阿弥陀経』（藤田宏達・法蔵館）、『浄土三部経概説』（坪井俊映・隆文館）『原文対照／和訳浄土三部経』（伊藤精次・日本仏教研究会）を参考し、使用漢字は現行漢字に改めた。

7 日本思想大系『蓮如・一向一揆』所収「御文章」（笠原一男校）九P、以下「御文章」はこれによる。

8 半紙本三冊（筆者架蔵）、中巻一二丁裏より一三丁表。

9 平田篤胤全集・第一〇巻、四四九P下。